千葉大学 安森亮雄研究室

社会につながる型〈ポスト・タイポロジー〉の探求
—リサーチとデザインを結ぶ回路で建築を共に学ぶ—

安森亮雄（千葉大学教授）

はじめに

「大学で教える建築家の建築家教育」というテーマについて、大学で建築を教え・学ぶ場面は、学科カリキュラムから、研究室活動、さらに普段の何気ない会話や振舞まで多岐にわたる。私は、現在、千葉大学で活動して3年目になるが、工学部の建築学コースの教員を本務としながら、墨田サテライトキャンパス（2021年度開設）を拠点とする分野横断のデザイン・リサーチ・インスティテュートにも所属し、またキャンパス整備企画室の室長も兼務するなど、教員としてもいくつかの側面がある。さらに、それ以前は宇都宮大学で11年間活動し、もともとは東京工業大学で学生時代から過ごし、その間にオランダに留学した経験などをもつ。この間教員として、カリキュラムの再編や、学部・組織の立ち上げに関わった経験もあるが、複数の大学や組織に関わってきたことから、本稿では特定の大学・学科を代表して紹介することは避け、個人の建築家・研究者・教育者として実践してきた研究室活動と担当科目を中心に、その背景から論じることにしたい。

そこには、空間や形を創造するという建築家の本分をもとにしながら、現代の複雑化・高度化する社会における建築設計の領域の拡張や、その中で建築家の職能を見定めること、大学の社会的役割の変化とキャンパスの行方、地域社会との連携、領域横断による知の革新などが関連することになる。

理論と背景

学びのベースにある、研究（リサーチ）と設計（デザイン）の回路

建築設計の実践を進めながら大学で教育に携わるという過程は、いわば次世代の再生産のプロセスである。私は、そこに研究（リサーチ）の側面を位置付けることが重要であると考えている。いわゆるプロフェッサー・アーキテクトの連綿とした実践の中で、これまでさまざまなスタンスがあったと思われるが、個人的継承に基づく、師の作家性への憧憬や、実務経験の伝授といった側面も否定するわけではないものの、それを超えて、建築を生み出す方法論を共有することが重要ではないだろうか。そこで、教え・学ぶことのベースに、研究活動（リサーチ）による分析・体系化を置き、設計活動（デザイン）による実現・社会化との両側面をフィードバックする回路を意識している。

一般的に建築設計のプロセスで、リサーチは多少なりとも行われている。例えば、設計中のプロジェクトの地域的な背景や関連事例をリサーチすること（社会学と歴史学）、地域を調査するなかで徐々に現地でメンバーシップが形成され将来像を共に実現していくこと（アクションリサーチとまちづくり）、あるいは、設計の前段階の利用者の要望把握や完成後の利活用を調査すること（プログラミング、Pre/Post Occupancy Evaluation等の計画学）などが挙げられる。これらは現在、建築が社会化されるなかで欠かせない側面となっており、自ずと建築家の職能が関わる仕事の一側面を形成している。建築設計をとりまく諸条件は拡張し、リサーチが重視され、これらは設計教育にも取り入れられつつある。しかしながら、こうした設計行為の背景や周辺のリサーチだけでは、実は具体的な線をひくための論理に至ることは難しい。設計行為は解がひとつではない連立方程式を解くようなもので、そこに形をつくり、建築を構成するもうひとつの論理が欠かせないからである。

建築と都市の関係性

設計行為とは、さまざまな部分をひとつの建築の全体としてまとめることである。その中で、リサーチを空間や形につなぎ留め、さらに展開する回路として、私は、次の2つの方法論をとっている（図1）。

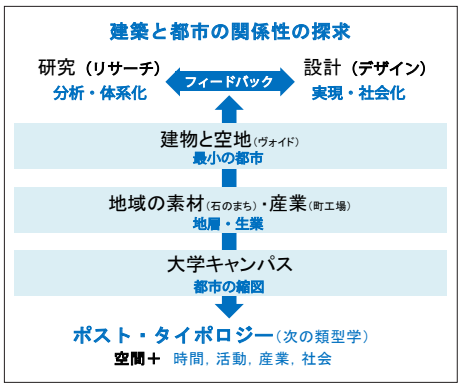

図1　リサーチとデザインの見取図

まず、設計と研究のフィードバックに、「建築と都市の関係性」を置くことである。設計行為は建築の全体を組織することであるが、その全体性は、現代では単体の建築にとどまらず、社会や環境の中での建築の位置付けが重要になっている。建築を都市の部分をなす要素として捉え、部分と全体の関係を、ひとつ大きなスケールで位置付けることで、構想の幅を広げ、社会と環境にひらく建築を構築することができると考えている。

こうした建築の周辺や、集合、コンテクストとしての都市についての関心は、20世紀半ばから近代建築の捉え直しや都市の変貌の中で行われ、大学のスタジオや研究室で学生を含めた都市リサーチが展開されてきた。1960年代後半から70年代には、複数の大学でデザインサーヴェイが行われ、失われつつある農漁村の記録や、新たに隆盛する繁華街の様相などが捉えられた。同時期にアメリカのイェール大学では、ロバート・ヴェンチューリの大学院スタジオで、砂漠の中に出現した人工の都市・ラスベガスのリサーチが行われ、自動車のスピードやサインに対応した建築群の新たな様相を、『Learning from Las Vegas』という本にまとめ、ポストモダンの建築理論が用意されていく。また、1990年代半ばに、レム・コールハースがハーバード大学GSDの教授に着任すると、「Project on the City」と名付けたスタ

ジオを開始し、グローバル化の中で新興するアフリカや中国などの都市リサーチを進めていく。日本でも1990年代後半、塚本由晴・貝島桃代らの東京工業大学のメンバーを中心に、東京の過密と複合によるアノニマスな建築を調査した『メイド・イン・トーキョー』がまとめられ、私も大学院生として参加している。こうした系譜の先に、現代の建築と都市の関係を構築する都市リサーチを展開しようとしている。

こうした都市リサーチは、建築と都市のデザインを連続的に捉えることにもつながる。私が留学したオランダは、国土の大半が干拓地であり、土地も人工的に作りデザインするため、建築設計／ランドスケープ／都市計画が連続的なデザインの対象となっている。留学したベルラーヘ・インスティテュートでは、大学院が都市リサーチのシンクタンクとしても機能し、講評会に自治体関係者が同席する姿も日常的にあり、現在の教育の方向のひとつとして定着していると思われる。

ポスト・タイポロジー　空間 ＋時間・活動・産業

リサーチを空間や形につなぐもうひとつの方法は、タイポロジー（類型学）による思考である。観察と設計を同じ視座で行い、形につながる媒介項として「型」（タイプ）を位置付ける態度である。世の中に存在する千差万別の形、敷地や施主が違えば、ひとつとして同じものがない建築の形を、可能な限り論理的に、共通性の中で捉え、設計行為に論理（ロジック）を見出そうとするものである。例えば、家型は古今東西の家の形に共通する「型」である。それと同時に、地域性や時代性が反映された建築の文化にもとづく形といえる。こうした「型」は、建築作品の中にも、個別の建築家の特徴を超えて見出すことができる。

この方法の基盤は、東工大で所属した坂本一成研究室で展開した建築の構成論にもとづいている（図2）。さまざまなビルディングタイプや、それらを横断して、主に20世紀後半以降の現代建築家の作品を分析していた。室やヴォリュームの部分の単位と、それによって構成される全体の構成から、一見バラバラに見える建築作品の群れに「型」を見出し、その背景にある建築設計の内在的な論理を見出そうとするものである。このリサーチは、徐々にその全体性を拡張し、建築作品に留まらない建物の集合による都市に広がり、前述した「建築と都市の関係性」として、私は坂本研の最後の博士論文を、東京の建物と空地の構成についてまとめた。これらの方法論の背景には、20世紀の言語学と記号論における、パラディグム（要素の範列）とシンタグム（全体の統合）の関係にもとづく構造的な分析があり、これらを知的基盤として建築意匠論に展開したものである。建築意匠のロジカルな分析は、エンジニアリングや歴史学と独立した意匠の論理を構築する上で大きな有効性をもった。しかしながら、ここでの単位や全体は、20世紀的な空間の自律性や、時間軸を伴わない共時性をもとにしており（言語学の形式と同じくする）、空間とその背景や意味を切断する批評的な方法は（設計行為としてはそれらを含めた総体を考えているものの）、限界も見え始めてきた。

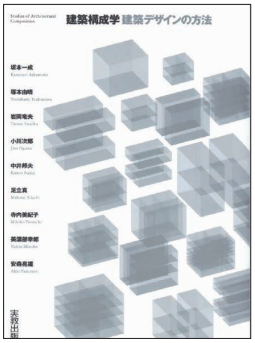

図2　『建築構成学』（2012）

そこで、空間をもとにした「型」に、先に述べたような現代の設計にまつわる多様な側面を反映させ、持続可能社会の前提となる時間軸や、生き生きとした人々のアクティビティ、地域や産業を反映した素材の具体性などをふまえた、ナラティブな「型」を社会の中に位置付けたいと考えている。空間を基礎とする「型」の論理（タイポロジー）を、これらの諸側面を組み合わせた「ポスト・タイポロジー」として捉え直そうとしている。

実践とテーマ

大学におけるシンクタンク機能と分野横断
キャンパスのリサーチ／キャンパスコモンのデザイン

ここまでに述べた「建築と都市の関係性」を具体的に見出し、「ポスト・タイポロジー」を媒介にすることで、いくつかのテーマを展開している。以下では、具体的な実践について述べていくが、まず、現在の大学と社会の関係、テーマのひとつである大学キャンパスについて触れたい。

研究と設計の対象は、地域や社会と連動し、具体的な課題を扱うものが多い。そのため、地域のNPOや自治体の関連部署、また地域産業などと連携している。大学という第三者的な立場で学生が地域に入ることが、住民や関係者が気づいていないかもしれない、その土地の魅力や可能性を引き出すことになる。教育と研究の場を、地域や社会の分析と将来像を示す、シンクタンクとして機能させことを意識している。同時に、大学による課題解決や特色の再定義といった背景から、これまで所属してきた大学では分野を横断する組織再編が行われ、キャンパスのあり方も変化してきた。

その中で、「大学キャンパス」は大学教員として一番身近なフィールドでもあり、リサーチとデザインの対象となる。キャンパスは多くの建物があり、学生・教員・地域住民を含めたさ

図3-1　宇都宮大学陽東11号館・地域デザイン科学部棟（2017）

図3-2　千葉大学墨田サテライトキャンパス（2021）

図3-3　とみくらみんなのリビング（2019年度グッドデザイン賞）

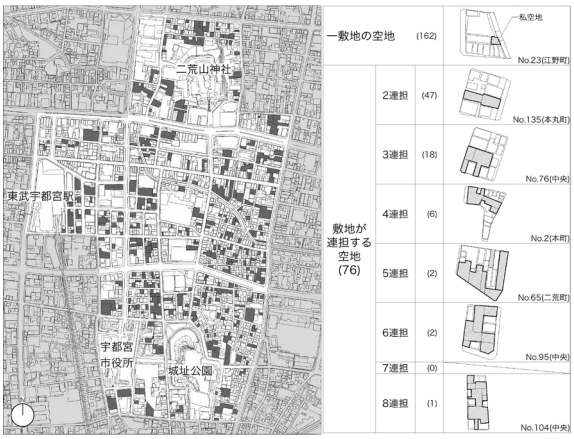

図4-1 空地の連担のタイポロジー（宇都宮市）

図4-2 かまがわ川床桜まつり（2015年度グッドデザイン賞）

図4-3 千葉公園通りでのワークショップ（2022）

まざまな人々が活動する“都市の縮図”とも言える空間である。また同時に、キャンパスは市街地のひとつのエリアを構成する“都市の部分”となっており、まちとの連続性も可能性である。都市建築のビルディングタイプとしてのキャンパス建築と、まちとつながるキャンパスコモンという視点から、リサーチに取り組んでいる。

宇都宮大学では、2016年に地域デザイン科学部が発足し、もともと工学部に所属していた建築と社会基盤の2学科に加えて、新たにコミュニティデザインの学科が加わり、文理融合で地域の課題解決を担う人材を育てている。改修設計した工学部の建築棟に隣接して、学部共通の講義室と別キャンパスから移転してきたコミュニティデザインの教員の研究室を含む新校舎を設計した。地域と大学を通り抜けで結ぶ動線に面して、アクティブラーニングを行う教室群が並び、地域と学生の活動があふれ出す「学びの商店街」となっている（図3-1）。

千葉大学では、2021年度に墨田サテライトキャンパスが開設され、ここを拠点にデザイン・建築・都市環境・イメージング等の工学部で設計を担う学科と、園芸学部のランドスケープ分野、さらに健康なまちを考える予防医学などによる、分野横断のデザイン・リサーチ・インスティテュート（DRI）の活動が始まっている。もともと東京高等工藝学校（大正10年）に由来する建築や工業意匠の分野をもち、東京下町のものづくりと関係してきた経緯があり、学部や大学院の組織は従来のまま設計の諸領域を横断する研究組織として活動を始めている。この校舎は、墨田区の旧中小企業センターを改修したもので、隣接する公園や専門職大学とともに、地域につながるキャンパスコモンを提供している（図3-2）。

キャンパスとまちの関係は、敷地を開放することに留まらず、まちに出てキャンパスの活動が広がることにもつながる。宇都宮大で取り組んだ元タバコ屋の空き家改修では、学内のコミュニティデザインの研究室と連携して、地域の拠点を設計施工した（図3-3）（連携：宇都宮空き家会議）。内部の土間を広げ、県産材の木製の庇と既存の窓口を活用し、ここでもタバコ屋のタイポロジーを再生したデザインとなっている。

空地のリサーチ／設いのデザイン

最も長く取り組んでいるテーマは、私の博士論文から継続する「都市の空地」である。建物があればその周囲には空地が存在する。空地は敷地境界を超えて広がっており、空地に面する建物の集合は、“最小の都市空間”と言える。特に近年は都市の縮小を背景に、地方都市で空地が増加している。空地が隣同士つながる連担空地の形成プロセスを捉え、時間軸を含めた空地のタイポロジーをリサーチしてきた（図4-1）。

近年の空間（スペース）から場所（プレイス）へという潮流を背景に、場のデザインも展開している。宇都宮市では中心市街地を流れる河川で「かまがわ川床桜まつり」（図4-2）の会場をデザインし（主催：NPO宇都宮まちづくり推進機構）、春の恒例行事となった。これは「カマガワヤード」や商店街の「オープンカフェ」の社会実験に展開し、千葉都心でも「ウォーカブル推進社会実験」（千葉市都心整備課）と連動して、道路を滞在空間にするための取り組みが始まっている（図4-3）。そこでは、事前調査から、設計して場ができ、実現後に人々のアクティビティを検証する一連の流れに学生が関わっている。こうしたプロセスと建築未満ともいえる都市の設いに学生が関わることは、現在の建築設計や建築家の職能の再定義を反映したものと言える。

また、千葉大学墨田サテライトキャンパスの大学院科目「コレクティブデザイン演習」では、墨田区京島において、区やURが所有する用地や代替地を対象として、地域のために空地を暫定的に利用する調査提案を行っている。空地を考えることが、デザイン領域を横断した思考を必要とし、将来の職能の展

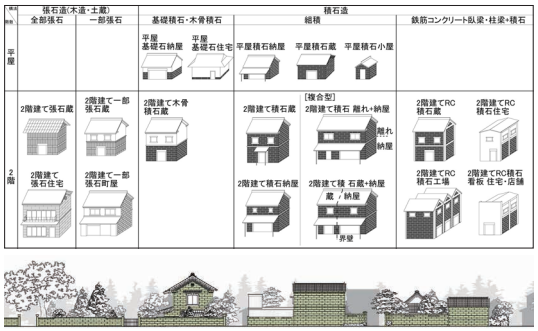

図5-1 大谷石建物のタイポロジーと町並み

図5-2 震災がれき大谷石の休憩所（2013年度グッドデザイン賞）

図5-3 日本遺産大谷の持続可能な地域づくり（日本建築学会関東支部提案競技、最優秀賞、2021）

©morinakayasuaki

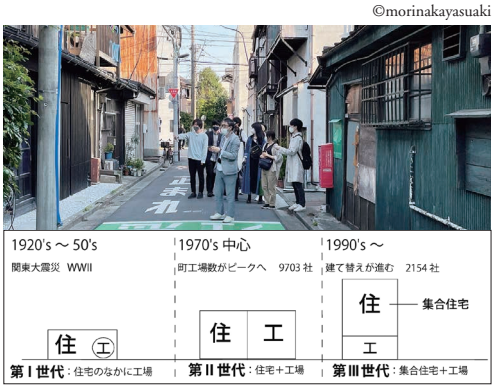

図6-1 町工場のフィールドワークと世代

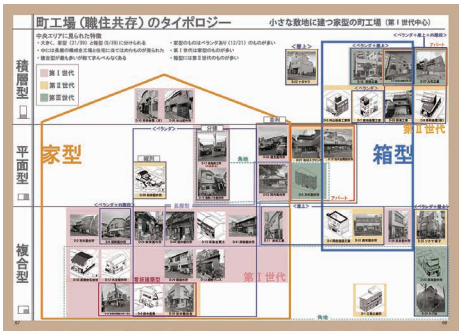

図6-2 町工場のタイポロジー

図6-3 大学のある街のトイレ 学生最優秀作品（村山香菜子、星野結妙：小径と光のトイレ —狭小を使いこなす墨田の街と共に）

開に寄与すると考えている。

石のまちのリサーチ／素材と地域の再生のデザイン

宇都宮大で出会った大谷石（おおやいし）から「地域の素材」というテーマが始まった。近年、地域の再生においても、地域素材が着目されている。建築を構成する要素が、具体的にどんなマテリアルで、どこから来て、誰が加工したのか、というトレーサビリティや事物連関を捉え、いわば“地層との連関”から建築と都市の関係を捉え直そうというものである。

石蔵がみられる集落や市街地を対象に、毎年フィールドワークを行い（協働：NPO大谷石研究会,栃木県建築士会）、500棟以上を実施調査し、アノニマスでヴァナキュラーな建物のタイポロジーと、その連続による町並みをリサーチしてきた（図5-1）。この調査は徐々に他の石が産出する都市に広がり、千葉県の房州石をはじめ、全国の「石のまち」を現在調査している。

東日本大震災の際には大谷石のがれきも発生したが、それらを再利用した休憩所をキャンパス内に設計施工した（図5-2）。宇都宮大の修士設計の一部として、まちなかでの展開も見据えて取り組み、石工の指導協力のもとに研究室の学生でセルフビルドした。また、大谷地区では、多くの採石場跡や空き店舗があり、それらを含めたエリアリノベーションを大学院の課題で取り組んだ。発表会は採掘場跡で行い、産業跡地の活用を試しに実践し、提案のいくつかは実現されている（協働した非常勤講師・塩田大成氏による）。さらに、千葉大では、大谷地区の地域づくりをテーマとした建築学会のコンペで、採石産業軌道の再生と旧駅を結ぶ地区の回遊性を提案した（図5-3）。過去から未来に至る時間の重なり（時層）のプロジェクトである。これらの取り組みは、調査した集落の町並みが文化庁日本遺産（2019）の構成要素になるなど、地域の建築文化の中に研究室でのリサーチや授業を含むデザインの実践が位置付いている。

町工場のリサーチ／職住共存と空き工場のデザイン

地域の素材から派生して、それを生み出す「地域の産業」におけるものづくりの空間もテーマとなっている。工場の空間は、特有の魅力と活気があり、作業に適した空間の設いから、生産の様子が表出する都市の風景までが魅力的である。こうした建築と都市の関係性を“産業の連関”から捉えるものである。

地方都市や周辺市街地では、手工業による地域産業が息づいており、宇都宮大では、染工場や酒蔵、製陶所などを対象にものづくりの空間を調査してきた。千葉大では、墨田サテライトキャンパスの開設を機に、ものづくりの町である墨田区のリサーチをしている。私が担当する大学院スタジオでは、「町工場の世代と再生—墨田の地域産業における職住共存の行方—」をテーマにフィールドワークを行っている（非常勤講師・森中康彰氏と共同指導、連携：墨田区産業振興課、都市計画課、図6-1）。ここでも町工場のタイポロジーを分析し（図6-2）、工場と住まいが隣り合う職住共存の型を捉え、また、関東大震災の復興から、昭和40年代の最盛期を経て、都心居住によるマンション化を伴う世代の変遷を捉えている。経営者へのヒアリングを経て、町工場の改修や建替えの提案を行い、一連の成果をブックレットにまとめている。町工場には、空き工場となっているものもあり、活用に向けた共同研究も始まっている。

さらに、墨田サテライトキャンパスに隣接する公園では、学生を対象に実施を前提とした公衆トイレのコンペが開催された（主催：アーバンデザインセンターすみだ）。私の研究室の学生は、スタジオで観察した墨田の町工場の建築的な工夫や設いをもとに提案して最優秀賞を獲得し（図6-3）、今後実現される予定である。リサーチとデザインの回路を学生自らが実践し、デビュー作ができる循環が始まっている。

おわりに

ここで述べた私なりの理論と実践は、いわば社会につながる建築の型を探す試みである。それは、まだ見たことはないが、私たちにフィットする、次の社会と時代の建築を求める作業であり、その中に次世代の建築家を育てることを重ねている。「大学で教える建築家の建築家教育」とは、このプロセスの中で共に学び、実践し、理論を構築し続けることではないだろうか。私のように大学をベースに設計活動を行う者にとって、このような研究（リサーチ）、設計（デザイン）、学びの循環は不可分であり、その時間を共にした学生が、次世代にさまざまな形で方法論を発展させていくことを期待したい。

安森亮雄（やすもり あきお）
1972年東京都生まれ、愛知県育ち。1996年東京工業大学建築学科卒業、オランダ・ベルラーヘ・インスティテュート留学、東京工業大学大学院修士課程・博士課程を経て、助教（坂本一成研究室）。2009年宇都宮大学准教授（工学部、2016年地域デザイン科学部）。2020年～千葉大学教授（大学院工学研究院建築学コース、デザイン・リサーチ・インスティテュート兼務、キャンパス整備企画室長兼務）。博士（工学）